

# 白紙余談

## 生産性第一主義、生産効率第一主義が主流になることの危険性

◇あるIT業界大手が打ち出した「新卒採用は高度人材のみ採用する」という方針が、いい意味でも悪い意味でも、就活生たちの間で波紋を呼んでいるようだ。

◇要するに入社後に社員教育をして育てるという方針は捨て、最初から即戦力として能力を発揮し、会社に貢献できるように新卒の高度人材しか相手にしないというところらしい。そのため、年収は1年目で「700万円以上」が保証されているのだそうだ。

◇実は同様の採用システムを実施している企業はすでに、それなりにあると思う。取り立てて珍しい話ではない。だが、就活生にも人気のIT大手が打ち出した方針だけに、さまざまな波紋を呼んでいるのだろう。

◇いわゆる「2025年の崖」を前に、とくに熾烈な競争社会のつぼにいる先端企業では、人をじっくり育てる暇はない、という意味もあるだろう。その点、以前に外資系証券大手などが打ち出していた初年度から実力主義でいく方針と、ちょっと似ている。いろいろ意見はあるだろうが、筆者はこういう方針を企業が明確に打ち出すのは、決して悪くない話だと考える。

◇しかし、その逆に「ウチは従来通り、新入社員はじっくり育てていきたい」という会社のほうが、スタンダードな存在であってほしいとも思う。

◇かつての外資系証券会社などと同様、初年度から高収入を得られる「高度人材のみの採用方針」をとっている企業においては、生産性や生産効率が「正義」となるはずだ。就活生はその部分で水準に達していないと企業側に受け取られれば、すぐに淘汰されるという

覚悟を持たなければならぬ。

◇そしてその生産性のカギを握る最大の柱はデジタル化の推進であることも、いうまでもない。このあたりの動きは、国が推奨するDX化への流れとも一致するわけだが、デジタル化の推進で生産性や生産効率が上昇するのはいいにしても、問題はそこで必ず生じてくると思われる、「余剰人材の切り捨て」への動きだ。

◇だから、冒頭のIT大手のように最初から「ウチは高度人材以外は採用しない」と宣言する企業は、むしろ良心的だといえる。しかし、最初はそうした方針ではなかったのに、世の潮流の関係で、途中からそうした方針をとるような企業が続出すると、どうなるか？結果的にはあるが、後から入ってきた高度人材層による、既存社員の淘汰が始まるとみるのが順当だ。

◇生産性第一主義の世の中が、他方で厭世観を蔓延させる危険は、かつての急激なオートメーション化時代に問題となった「人間性喪失時代」が証明している。あのチャップリンの名作映画『モダンタイムス』が風刺的に描いたような世界だ。

◇繰り返しになるが、だからいちばんいいのは、高度人材のみを採る会社がある一方、従来通りの方針をとる企業も常に一定以上の割合があり、バランスが保たれている状態だ。もし世の流れがそれを許さなかったら？ 残念ながら、それは世の流れが間違っているということにならなければ、人間社会は強者ばかりが繁栄するような、ギスギスしたものになりかねない。

◇そんなアンバランスな社会はご免である。(E)